

Problématique de la spatialité dans l'anthropologie japonaise

[version Abrégée]

建築することのはじまり：見ること、立てること

——日本の原始的信仰・民俗の事象を通して——

加藤邦男

1

JAPARCHI が京都工芸繊維大学で開催した先のシンポジウムで、数名の発表者から、建築の「生きられる空間」に関わる興味深い議論が展開された。建築作品やその廃墟と幻影、日本の建築的空間における「結界」や「境界」の現象について等である。建築は、建築家の、あるいは建築する者の行為の結果として、ある「場所」に立ちあらわれてくる何ものであるかであり、そのものは、具体的な表象の構築に伴われていて、一度その表象が確認されるやいなや、それを「ある」ことが出来た軌跡を跡に残して、うつろい、消滅していく。消滅したものは、その「ある」ことに関わった人の心の内奥または外的事物の背後にその影を潜め、詩的瞬間が訪れる字義通りの「未到来の豊穡な時」を待つのである。そうだとすれば、われわれが具体的な存在物として把握し操作する一切の建築作品は、それを受容する者の側に立てば、一時の幻影の光輝に過ぎず、または物や人の背後にその秘やかな出来の現象を待つ、かの存在以前の純粋な詩的存在と言わねばならない。……われわれ建築する者は、技術的な構築を实践する者であると同時に、より根源的には、その過程を通じて、立ち現れる「あるもの」(仮象) のほかならぬその「「ある」こと」の到来を眼にする視覚的証人であり、そのことによって、広大無辺の世界（消極的無）が開く瞬間を「生き／自覚する者」であり、その瞬間の可能性の持続をもたらす者でもある。

2

境界とは、論理的にはある拡がり、すなわちある領域と、それとは区別される他の領域とを区画する地帯を言うのである。しかしそこに「私」が入り込むことによって、その領域が私の「内部」として認知され、それとは区別される領域が背後の「地」としての「外部」に退き疎外される。この「外部」とは、外的に表象される外側と、私の心の深奥に伏蔵された背後の地平をも含むことに注目しておきたい。この内／外の区画は、漠然と「内部」の周辺の広がりであったり、また認知可能な地理的もしくは物的な「境界」として表象されたりする。しかし私の内部は、私のテリトリーとして認知される既知の領域であるが、外部は未知の領域であり、私の領域にも浸潤している広大無辺の非限定な領域である。したがって境界とは、この広大無辺の非限定な領域をその背後に「伏蔵」しているとも言える。あるいは、境界そのものが多義的周辺であり、魔性、混沌、闇などの多義的意味が

湧きいずる漠然とした広がりとしか言えない。歴史的には、この領域の内外を区切る境界は、此岸・彼岸として、あちら／こちらを分かち標識——シグナル、徴表、象徴など——であったりする。あるいは折口信夫が言及したように、「どっちにもつかぬ空虚な土地」（『折口信夫全集』第10巻、中公文庫、1975-1976所収の「枕草子解説」）であり、曖昧、空虚な広がりである。これはトポロジー体系において観念される明確にある領域を限る線の表徴により示される境界線ではなく、未知の外部から、もしくは私の内部から移動する場合に踏み越えなければならない不確定な一定の広がり地帯である。またこの場合の「私」とは、対象化される私の身体ではなく、「生きられる身体」としての私であるので、境界は、現実のものから想像上のものまでを含むことは言うまでもない。したがって、ここで問題にする境界そのものは、線や点などによって実体的に表象すべきではなく、多義的意味が何らかの形姿となって現象する、生きられる領域とは異質なある広がり、正確には現実的であるものの想像的でもあり夢幻的でもある、特殊な両義的領域と言わねばならない。それは折口の言う「空虚な境界」、A・ファン・ヘネップの『通過儀礼』で触れる「中立地帯」に通じるのである。民俗社会において、村はずれの辻・橋や坂・峠などの境界が、内／外・生／死・現世／他界といった二つの世界の間を浮遊する人や物らの棲み処であったことはいうまでもない。「諸世界間の空隙」としての境界を往来する者は、身体的にも呪術＝宗教的にも、境界性（ヘネップのいう過渡性）を帯びているのである。「橋や坂のあたりに群れ棲む、乞食・遊女・坂の者・呪術宗教者など、異形異類の人々。そして、橋姫・坂神・ひだる神〔筆者注（以下同様）：山路に浮遊して旅人を悩ます憑き物、霊気、行合神〕・産女〔道行く人を悩ませる赤子を抱いた産婦の霊〕といった、神霊や妖怪やモノが跳梁跋扈するものやはり、この共同体の周辺ないし境界であることを想起するにとどめよう」（赤坂憲雄『境界の発生』講談社学術文庫、2002、p. 45）といわれるのである。折口信夫にとって境界は、境界が帯びる無縁性、曖昧性のゆえに、はじめて神や異人との出会いと交歓が可能となる空虚な土地であり、出会いが生じる「交通の庭」であり、「山から異人がおりてきて、里人にあふ。どちらにもつかない、川で言へば、橋のような場所であふ。里人がこれを迎へる。土地の神、或は、土地の神の巫女として迎へる式をしたのだが、これを忘れて、ただの男、ただの女が迎へるといふ様になつた」（前掲「枕草子解説」）というように、境界の原型として語られる「冬祭りの庭に立ったという市」であった。

3

定住農民にとってかなりの程度普遍的な、秩序（村落共同体）／混沌（未開墾地・山林）という二元論的世界表象は、共同体の秩序の外に、さまざまなレベルの「異界」と「異人 stranger」の表象を生み出す。秩序の外に排除・疎外された者たちが、共同体に属する者たちから蔑視と畏敬の両義的眼差しのもとに、日本の「異人」は「マレビト」として現れてくるという。言い換えると、秩序と混沌の二元的世界を生きる共同民にとって、「異人」は遊行性を帯びて、秩序と混沌にまたがる両義的存在として立ち現れ、それを迎える定住農民は恐れと敬いの、「聖なるもの」が引き起こす両義的心理状態に引き裂かれざるを得ない。かくして、「異人」は、共同体から疎外・排除されると同時に神霊（訪れる外来神）を背負って訪れるものとして歓待される。しかし、「マレビト」は、外部の混沌すなわち「異界」から来訪する聖性を帯びた外来人 stranger であるが、祖先たる死者たちの住む「他界」から遣わされる使者でもある。「マレビト」の漂泊・遍歴は地理的広がりのみならず、時間的に前世から現世へ、現世から来世への漂泊としても顕現する。赤坂は「村境に境の神

を祭る塚所ダンノハナがあり、その向こう側に相対して現世的な〈他界〉である蓮台野が広がっているといった地理感覚に根ざしている」[例えば『遠野物語』参照]（前掲赤坂『境界の発生』p. 105）という特異な空間認識から、土地の占有を基盤として幻想・観念が成立する故に、〈他界〉もこの地理的な延長線上に措定されざるを得ないとする。こうして、共同体の外部である「異界」が同時に「他界」でもある特殊な条件のために、「マレビト」の地理的漂泊・遍歴が、「他界」という時間的彼岸からの来臨として受け取られてしまうと考えている。すなわちここに、「他界」と「異界」の両義的発生の根拠が推論されるのである。

以上から、場としての境界の特性が指摘された。すなわち、本来非構造的で両義性、非限定性、周辺性を特性としながら、彼方への出立・彼方からの来臨の時には、水平／垂直の空間的表象構造を示す。境界の両義性を媒介する「聖なる」場は、同時に「畏れるべき、険悪な」場としての特性が、境界現象の根底にある。すなわち、境界とは地理的な場所 *topos* としての漠然とした広がりでありながら、彼方からの来臨／彼方への出立が仮象として現象することを可能とする。それは地理的 *topos* よりも一層根底的な、つまり世界が露わにされるその根底にほかならない。現実または可能的なあらゆる仮象生成の「場 *khora*」（プラトン『ティマイオス』52B）とでも言うほかはない。

4

要するに、境界という現象は、異界もしくは彼岸を背後に伏蔵した両義的地平であり、そこから／そこへ、モノが出来し／消滅するところの「ある領域」であり、その出来／消滅の時であり、モノが現前するというある出来事の「起こる場所 *take place*」である。この場所はより根源的にはある種の「言表不可能な *indissible*」根底的広がり、われわれが場 *khora* として注目した原基盤がなければならず、この場そのものは常に多義的・両義的であって、逆説的な絶えざる否定と伏蔵のもとに、非現前の「無」として現前／非現前するのであった。時間的には、暦、年代の系列の間隙、時の移り変わり目（夕暮れ、朝ぼらけ、昼に対する夜など）、要するにこれまた非限定的な両義的・原初的・究極的瞬間の時である。このように時間的空間的区分を越えた、より根底的な「場 *khora*」の立場においてはじめて言及可能でありかつまた不可能な原根源に沈潜することが要請され、これがわれわれの生きる日常性を表層とする生を動かすものにほかならない。

5

折口信夫『死者の書』（初出は、雑誌『日本評論』、1939）を巡って、最後に日本の民俗における境界現象の事例を検討しておこう。

この折口の「死者の書」は、民俗的脈絡における境界現象を、神話をさらに遡る日本の古層を露わにし、神話から仏教の信仰世界を通して、さらに文学的手法によって、ヴァレリーとともに詩的に普遍的な場の働きを示したものと考えられる。それはまた、室町時代に大成した、申楽の複式夢幻能の舞台を思い出させるのである。以上、日本文化に通底する「場 *khora*」の文脈を、非主題的に、その余白、無の地平を自覚し、一切をそこにおけるモノの織りなす遊動であると見た習俗的伝統を垣間見たのである。日本の建築が、優れて時空的であり、かつまた建築が建築を否定するような、生成と消滅の両義的な危うさの

上に成り立っているのは、まさにこの民俗的伝統にほかならない。

境界に立ち現れる異人、すなわち異界・他界からの来訪者が身に携える「杖」の意味が注目されてきた〔赤坂憲雄氏の研究を参照〕。そしてこの「杖を立てる」ことは、その者の素性を開示するとともに、その場所が「境界」であることをも示すのであった。われわれはここで「立てる」ことにも注目したい。わが国では「立てる」とは、モノを「見立てる」ことであり、作庭術では「石を立てる」という言説によって庭づくりの仕上がりを意味し、風景を見立てるのである。建築物の作事においては、呪術的なトーテムのように立ち上がる「立柱」は伝統的な建築建設工事の重要な一段階の完了を告げ、それを祝う立柱式が執り行われる（奈良の興福寺では、2010年10月に中金堂再建工事の立柱式が盛大に挙行された）。このように、「立てること」は、立ち現れる、見立てるなどと言う「立てる」であり、それは、特殊能力を具えた異人が、己の「杖」を大地に突き立て境界現象を暗示することにおそらく起源をもつのであろう。芸能一般がこうした非限定の地平から、周囲に余白を残しつつ白日夢のように目撃する者の心中に立ち現れ、制作者は、なによりもまず、そのことを見、立ち会う目撃者であったのであり、「建築する」を、「見る」と「立てる」もしくは「立つ」と言い換えて、その「はじまり」の深淵がここに垣間見られるのである。

参考文献

本論の執筆に際しては、とくに、赤松憲雄『境界の発生』および波平恵美子『ケガレ』の綿密な民俗資料の紹介・引用と考察を参照した。ここに謝意を表します。

- ジャック・デリダ『留まれ、アテネ』（矢橋透訳）みすず書房、2009. Derrida, Jacques, *Demeure, Athènes, Photographies de Jean-François Bonhomme*, Éd. Galilée, 2009.
- ロラン・バルト『明るい部屋』（花輪光訳）みすず書房、1985. Barthes, Roland, *Chambre claire, notes sur la photographie*, Éd. de Seuil, 1980.
- 加藤邦男「解説 建築・場所論——ゲニウス・ロキを巡って」クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ『ゲニウス・ロキ、建築の現象学をめざして』（加藤邦男・田崎祐生共訳）住まいの図書館出版局、1994, pp. 378-379.
- プラトン全集12『ティマイオス』（種山恭子訳）岩波書店、1974.
- プラトン全集4『ピレポス』（田中美知太郎訳）岩波書店、1975.
- 『枕草子解説』『折口信夫全集』第10巻、中公文庫、1975-1976.
- Gennep, Arnold van, *Les rites de passage. Etude systématique des rites*, Mouton, 1969. ヘネップ、アルノルト・ファン『通過儀礼』弘文堂、1999.
- 赤坂憲雄『境界の発生』講談社学術文庫、2002.
- 『他界と地境と』及び「前「古代」における日本」『折口信夫全集』第16巻、民俗学篇2、中公文庫、1988, pp. 331ff.
- 『出雲国風土記』『常陸国風土記』『風土記』（秋本吉郎校注）日本古典文学体系2、岩波書店、1958.
- 『萬葉集 巻第一』（高木市之助・五味智英・大野晋校注）日本古典文学体系4、岩波書店、1957, p. 310.
- 『日本書紀 巻第十四』（天武紀元年7月の条）日本古典文学大系67（坂本太郎・家長三郎・井上光貞・大野晋校注）岩波書店、1965.
- 『日本書紀 巻第十四』（雄略紀十三年三月の条）日本古典文学体系67（坂本太郎・家長三郎・井上光貞・大野晋校注）岩波書店、1965, pp. 142-143.
- 『日本書紀 巻第十四』（敏達紀十二年是歳の条）日本古典文学体系4（坂本太郎・家長三郎・井上光貞・大野晋校注）岩波書店、1967, p. 488.
- 和田萃「夕占と道餐祭——チマタにおけるマツリと祭祀」『日本学』6.
- 波平恵美子『ケガレ』講談社学術文庫、1957、2000.

- 波平恵美子「水死体をエビス神として祀る信仰——その意味と解釈」『民族学研究』42巻4号、1987.
- メアリ・ダグラス『汚穢と禁忌』（塚本利明訳）ちくま学術文庫、2009. Douglas, Mary, *Purity and Danger, an Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*, Routledge, 2002.
- Valéry, Paul, *La Jeune Parque* in Œuvres, Tome I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1957, p. 96. ポール・ヴァレリー、詩篇「若きパルク」『ヴァレリー全集1』筑摩書房、1977、p. 73.
- Valéry, Paul, *Eupalinos ou l'architecte*, in Œuvres, Tome II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1960, p. 147. ポール・ヴァレリー、対話篇『エウパリオスまたは建築家』『ヴァレリー全集3』筑摩書房、1967、p. 80. ポール・ヴァレリー、対話篇「エウパリオスまたは建築家」（森田慶一訳）森田慶一『建築論』東海大学出版会、1978、p. 322.
- 加藤邦男『ヴァレリーの建築論』鹿島出版会、1979.
- 折口信夫「死者の書」折口信夫『死者の書・身毒丸』中公文庫、1974、pp. 7-154.